

水際の散歩教育

～仙川ウォークラリーについて～

田 沢 興 光
国本学園小学校

Learning from walking along the riverside
～from the report of SENGAWA walktour～

Kunimoto Elementaly School
Yoshimitsu TAZAWA

Learning walking riverside
教育'散歩'水際

1. 学校教育から地域の環境教育へ

この報告は、前半部において大正期に生まれた「自然科」¹⁾の流れをくんでいる「散歩科」²⁾の教育について述べ、現在においても小学校教育のなかで実践されている内容と方法にふれることにした。この「散歩科」の教育は、今日叫ばれている「生活科」と多少見解の相違があり、むしろ環境教育に近いといえよう。

後半部においては、1989年10月1日に筆者が協力し世田谷区が実施した「仙川ウォークラリー」³⁾の実践（概要のみ）を中心に報告することにした。

「散歩科」の教育は小学校にとどまらず、地域社会の教育に普及することにより、環境教育がより展開されることを期待するものである。

2. 「自然科」と「散歩科」の教育

学校教育のなかに、「自然科」を特設しようという運動が高揚したのは大正期である。⁴⁾

従来小学校5年生から課していた理科を、低学年にまで引き下げ、「自然科」あるいは「直観科」を設置するため文部省に建議したのである。

筆者の前任校の私立成城小学校創設の頃米国の

「Nature-study」を日本に紹介した和田八重造にたのみ、諸見里朝賢訓導によって「自然科(Nature-study)」が具体化した。その時の自然科特設教材配当をみると、現今の「散歩科」教材の要素は、すでに大正期に設置された「自然科」のなかにみいだされているのである。当時の教材配当は表1のようになっている。⁵⁾

表1 第1・第2学年（1学期）における「自然科」の教材配当表

第1学年	第2学年
①※学校のお庭	①※蛙の卵採集
②※花と蝶	② 油菜
③ 毛虫と青虫	③※春の野辺 (草花と鳥)
④※播種及植付	④ 蛙
⑤ 鶏と雛	⑤ かたつむり、なめくじ、よとうむし
⑥ 金魚と目高	⑥ 蛆と蠅
⑦※初夏の小川	⑦ 螢
⑧ 蜘蛛	⑦※夏の森

(日本科学史大系, 9, 第一法規, 1965より)
※印は「散歩科」教材の色彩が濃いものとして筆者が付記したものである。

その後20年近くかかった1941年に文部省の『自然の観察（教師用）』が国民学校理科1～3年生の指導書として出された。板倉（1968）によると、この『自然の観察』は、前述の「自然科」教材配当をかなり参考にしたあとがみられると指摘している。⁶²

3. 「散歩科」教育の内容と方法

戦後間もない1947年から学園では、小学校の低学年教育のなかに「自由遊び」と共に「散歩」という時間を設定し、子どもたちに自然環境と接する時間と空間を意識的に与えた。当時の「散歩科」カリキュラムの課題は、表2のように示されている。⁶³

表2 第1・第2学年における「散歩科」の単元表

第1学年	第2学年
<1学期> ・学園めぐり ・つりがね池 ・初夏の水辺 ・夏の雑木林	<1学期> ・学園の春 ・たんぼめぐりと堤防あるき ・初夏の雑木林 ・夏の小川(夏の水辺)
<2学期> ・初秋のたんぼ ・ハイデルベルヒ ・不動坂 ・学園の冬	<2学期> ・あらしのあと ・秋のみり (生産地の探訪) ・晩秋の野山
<3学期> ・冬の雑木林	<3学期> ・学園の冬

(さんぽのある学校,「さんぽの教育史編」, p 160.成城学園初等学校出版部, 1979 より)

表1と表2の比較により、例えば「つりがね池」「不動坂」「ハイデルベルヒ」など具体的な地名や場所が出てくることが「散歩科」教育の特色の一つと指摘することができる。このことは子どもたちが生活している地域社会環境をみて歩くことを重視した現れである。もちろん実際にフィールドとして自然環境をみて歩く野外活動の重視は「自然科」の時と変らない。

ここで、地域を歩きながら直接経験を豊かにする「散歩科」の教育内容と方法の概略を紹介する。

<散歩する時間>

低学年の1・2年生に週2時間実施。時には出かける場所と学年の体力、天候などにより2時間続いたり、また2週間まとめて散歩する小遠足となることもある。

<散歩する場所>

散歩に出かける場所は、一応のめやすとして月ごとに課題ができていく。自然の四季折々の変化に合わせて一定の場所に出かけたり、農作物を見せるのに適した時期のものや、地域のお祭りなどの行事に出かけることで場所を定めている。

<散歩道（コース）>

なるべく社会環境や自然環境の材料にめぐまれている道で、自動車の通らない安全なところを選ぶようにする。川の土手とか林の道などを通るように心がけ、多少遠まわりの道程になっても、その途中で人びとの働いている様子が見られるところとか、また種蒔きや田植えをしている農家の人たちの姿が見えるコースなど、そのねらいによって様々である。

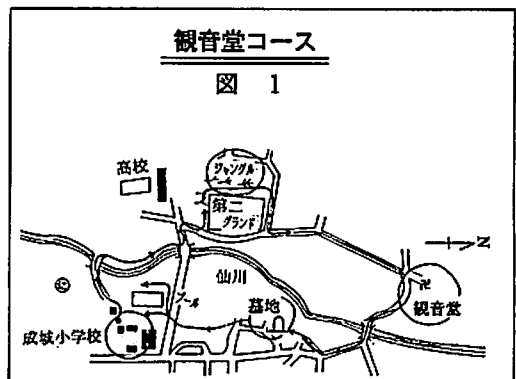


図1 成城周辺の散歩コース・観音堂行
このコースは観音堂へ行く道で、学校→ジャングル→観音堂→基地→学校となっている。
〔「教育改造」,45.成城学園初等学校, 1973より〕

〈散歩の仕方〉

散歩そのものは野外をぶらぶらと歩くことなので、なるべく整列を避けたい。まわりの自然物にとびついたり、関心のあるものに駆けていくようにしている。しかしやむを得ず交通の激しいところは2列に並んで歩行する。安全な歩道や田圃の畦道などに入ると一定の距離をおいて、グループごとにまとまって歩くことにしている。

教師は先頭につくこともあれば、後尾につくこともあり、場所と時により臨機応変に処置する。子どものリーダー格が先頭につけて案内することもある。

教師によっては、竹林のなかで「かぐや姫」の話をしたり、芝生の上で背空を眺めながら音楽をすることも。林道を歩きながら野鳥や虫の声に耳をそばたてるとか、小川のせせらぎや風に揺れる樹の葉など微細な自然現象の音に耳を傾ける“おしゃべりストップ法”もあれば、散歩の途中で偶然に出あったものを観察させたい時、その場に止めて周囲に集める“一時停止法”などしばしば活用する。

子どもたちにとって仲間たちと話しあいながら歩くこと自体とても楽しいことであろう。また散歩する行動は予想もつかないことがあったり、自分に気づかないことを仲間から教わったりする活動に楽しさや面白味が出てきたり、探究欲も生まれてきたりする。このように散歩教育は、まことに大まかで総合的な環境教育といえよう。

〈散歩マップ〉

どこへ出かけて行くのか、そこに何があるか最低限必要なことを、鳥瞰図で示したコースの案内地図“散歩マップ”で子どもたちに確認させる。地域の場所や建物、また季節ごとにより変化することもあるので時々職員室に季節ごとの“散歩マップ”を掲示しておく。

成城周辺の自然観察路

図 2

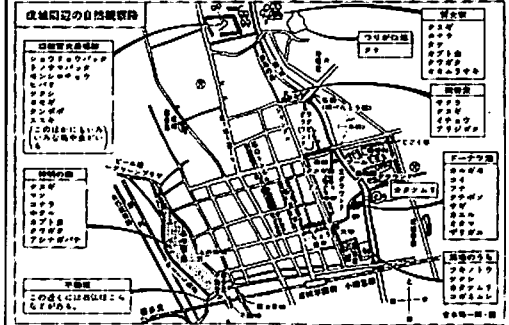


図2 散歩マップ(成城周辺の自然観察路)

このマップは1987年頃使用した散歩地図である。

(田沢興光(1987),虫だってつかめるよ,サイマル出版会.P247より)

4. 散歩科の教育的意義

成城学園では初期の頃(1917年創設)から現在にいたるまで、「自然と親しむ教育」という創立趣意を掲げている。⁸⁾

自然環境が人間を教育するという理念のもとに、学校周辺の田圃や林に出かけ、大空の下で出来る限りの時間を与えて自然と親しませる教育を実践し続けている。そのことにより、子どもの正常で健全な発達をうながすという教育効果も得られている。

具体的には、次の3項目があげられる。⁹⁾

(1) 直接経験を豊富にする

散歩することにより、自然の法則や社会のしきたりを知り、また季節の時候や生活の言葉などの知識を経験的に把握してくる。そして自然美に対する繊細な感受性をもちながら、ものごとをいたわり、いつくしむやさしい心や、生命を大事にする気持が身についてくる。このように散歩によって経験的に自然や社会環境とのつきあい方を学ぶ

ことができている。

(2) 行動意欲を高め探究心を伸ばす

散歩することにより、子どもの生まれながら持っている本性を伸び伸びと発揮し、行動的で探究的になる。そこには子どもらしい野性的で小さな冒険や創造という行為が生まれてくる。散歩によって子どもたちは自然とは何か、社会とは何か身体と心を通して認知する。

(3) 感覚を鋭敏にする

散歩することにより、目のつけどころが豊かになる。これは他人との存在が重要で、同じ対象物でも人により目のつけどころがそれぞれに異なり、また見えてくるものも違ってくる。このことを察知することは子どもにとって新しい発見になる。また地理的な位置のつかみ方や方向感覚、それに季節感などがみがかれ、自然へのせまり方や、逃れ方についての感覚が鋭くなる。

このような教育的な意味あいから、「散歩科」は低学年総合教育として位置づけられている。

5. 仙川沿いの散歩道教育

この散歩科教育も時代と共に変遷した。かつての武蔵野の雑木林や丘陵がいつのまにか失われ、地域環境の変化にあわせ散歩科教育は次の段階へと脱皮していく。すなわち学校教育にとどまらず、地域社会の環境教育へと展開したのである。

1960年代になると学園周辺の環境は、急激な変化がおこり、新興住宅と共に河川工事をはじめた。かつての田圃や学園内を流れていた仙川のせせらぎも一気に1級河川というセメント護岸に変身し、臭気のだぶ川と化したのである。

このような環境変化では、散歩教育は不可能と思われたが、子どもにとって広場や空地が失われてくればくる程、この教育の必要性があるということで継続研究されたのである。研究部員一同環境の変化と共に、散歩に適した好場所と散歩コースの実地踏査をはじめたのである。

その当時(1967年)の「散歩歳時記」¹⁰⁾にある月別配当表を見ると、かつての選定場所とくらべて、遠出の散歩ができなくなり、学園中心の道になってきたことと、旧教育大学農場跡地の広場を

中心にした散歩教育に改訂されていることがわかるのである。

この農場跡地までの道は、学園内を流れている仙川沿いの側道が最適で、散歩コースによく利用する小道となっている。この道端には季節ごとの野草が生え、背後には雑木がおいかぶさり、様々な小動物が棲息できるので、四季折々の特徴を子どもたちに教えてくれる。

この仙川沿いの側道は、その後20年経った現在でも主要な散歩道となり、散歩教育の子どもだけに限らず、朝夕には近くの住民たちの毎日の散歩道となってきた。ジョギングをしたり、水鳥の観察をするなど地域住民も環境に関心をもちはじめてきたのである。

6. 地域教育への展開

1989年3月初旬に世田谷区役所職員(土木部)が来校し、「水際の散歩道整備・20km網計画」について説明された。ここで長年地域学習の自然教育に携わっている仙川中心の環境教育実践校である成城学園に協力を得たい。そして水と緑の美しいふれあい豊かな散歩道・仙川ルートを具現したいとの要望があった。その時提出された計画書¹¹⁾のなかで、特に「学校の協力を基に子どもたちの地域学習、環境教育の場として仙川を活用する」という事項について協力を望まれてきた。本学園においても学校教育にとどまらず、地域の環境教育に広がり深まることならば、今までの散歩科教育の成果を改善して、協力しようということになった。

7. 仙川ウォークラリー

世田谷区では、'89年度に子どもをとりまく環境について見なおすことを目的として「子どもと環境」をテーマに、様々なイベントを開催した。その一環として、この「仙川ウォークラリー」が位置づけられた。“都市河川としての仙川周辺を歩きながら身近な水と緑と道の魅力、そして未来について考えること”を目標としたのである。

10月1日、仙川ウォークラリーは次のようにして実行された。

〈時間〉 AM 9:30～12:00

〈コース〉 成城池→桜並木→仙川橋→六地藏
→観音堂→つりがね池→農跡地→仙川側道
→桜橋→学園正門

〈方法〉 ガイドマップと手づくりの手帳を
もって各グループごとに出発。以下各都で設
問した事例を記述する。

- ・ 池の水、仙川の水、つりがね池の水質につ
いて比べる
- ・ サクラ並木の葉の特徴を調べる
- ・ 近くの橋の名称と仙川の水質をみる
- ・ 仙川の洲について観察記録する
- ・ セキレイをみて観察記録する
- ・ 基地の地蔵について観察する
- ・ 観音堂内でCP.1 (CPはチェックポイント
を意味する。以下CPと記す)のスタンプを押す
- ・ イチョウの木の実と葉の形をスケッチする
- ・ つりがね池の水鳥を観察する
- ・ つりがね池の水質検査CODについて比べる
- ・ つりがね池でCP.2のスタンプを押す
- ・ 農跡地の広場で空を見上げ休憩、CP.3の
スタンプを押す
- ・ 仙川沿いで歩幅による実測をする
- ・ 仙川の道端にはえている笹を利用して笹茶が
のめることを体験する
- ・ 仙川散歩道でCP.4のスタンプを押して、ア
ンケートに答えながら区民会館でゴール。
15項目の設問箇所とチェックポイントがあり、
手帳に記録しながら散歩したのである。
午後から区民会館で仙川子どもフォーラムが開
かれ「仙川メッセージ」が採択された。

8. 河川フォーラム「かわ・川・河」

1990年、世田谷区では「長寿社会と環境」とい
うテーマで、人と川との交わりを求めため河川
フォーラムを企画し、8月26日に実施した。'90
年度も前年度のように河川フォーラム実行委員会
が主催となり、世田谷区が共催という形式で実施
した。

このように世田谷区内においては、学校はもと

より地域における水際をはじめとして、各地域部
所で散歩教育の実践が今後とも継続され、ますま
す発展していく可能性がある。

註

- 1) 踏見里朝賢(1923), 低学年理科教授の理想と実際,
厚生閣. p372.
栗山 重(1933), 低学年自然科学実践機構, 晃文社.
- 2) 先行研究は柴田 勝(1961), 教育経営12年, 童文
社 p293.
山田一枝「一年生の散歩」教育改造, 9, 成城教育
研究所, 1947.
庄司和晃(1988), 総合教育という教育実験, 明治
図書. p152. がある.
- 3) 世田谷区「世田谷区のみちづくりリレーイベント
No.8」, 1989.
- 4) 中野 光(1968), 大正自由教育の研究, 黎明書房,
p229.
- 5) 「自然科学(低学年理科)特設運動」日本科学史大
系, 9, 第一法規. 1965. p405.
- 6) 板倉聖宜(1968), 日本理科教育史, 第一法規. p3
64-371.
- 7) 田沢興光(1979), さんぽのある学校, 成城学園初
等学校出版部. p160.
- 8) 「私立成城小学校創設趣意」沢柳政太郎全集, 4,
国土社. 1979. p406-411.
- 9) 田沢興光(1987), 虫だってつかめるよ. 散歩のあ
る教育, サイマル出版会. p264.
- 10) 成城学園初等学校散歩部, (1967), 散歩歳時記, 三
揚社. p20.
- 11) 世田谷区(1989), 水際の散歩道整備基本計画策定
調査・仙川ルート. p92.

